

フィールド で考える

退官寄稿

手仕事によるモノづくりの 現場にて

吉本 忍よしもとしのぶ
民博民族文化研究部

輪状の織物との出会い

わたしがはじめてフィールドワークをおこなったのは、四四年前の一九七〇年。その現場はインドネシア東部のティモール島である。当時、京都市立芸大の工芸科染織専攻の四回生であったわたしが、ティモール島に行くことになったのは、探検部に所属していたことに起因しており、今日、「イカット」の名で世界的に知られているインドネシアの絣織物の製作現場での調査がおもな目的であった。とはいうものの、当時の日本ではインドネシアのイカットについての情報は無きに等しく、オランダの文献によって、ティモール島をはじめとする島々で二〇世紀前半にイカットが織られていたことを把握していたにすぎない。そうしたことから一九七〇年の時点で、ティモール島でイカットが織られているか否かということについては、現地入りするまで不明であった。しかし、さいわいにも飛行機が到着したティモール島クパンの空港で

目にした人たちの多くは、イカットを身にまとしており、それらのイカットが島のいたるところで織られていることがあきらかになった。

このはじめてのフィールドワークでわたしは、さまざまな未知の体験をしたが、最大の驚きは、イカットをはじめとするすべての織物が輪状に織りあげられていることであった。このことは、織物を織ったことがないと理解しにくいだが、わたしが大学の製作実習で織りを習ったときの織物の織り上がりのかたちは四角形であり、日本の伝統的な織物の織りあがりのかたちも、すべて四角形である。したがって、輪状の織物との出会いは、当時のわたしの常識的な理解をはるかに超越したことであり、この驚天動地ともいえる体験によって、「常識を疑ってみる」ということが、その後のフィールドワークでのキーワードとなっていった。

そして、今に至るまで世界各地でおこなってきたフィールドワークでのたび重なる発見が、つづく

たとえば、織物を織るという技術は人類史の中枢技術であり、産業革命のみならずIT革命も織りの技術の延長線上に出現し、織りの技術は、新石器時代から現代まで、人類の社会や文化の進化和発展に深く関わってきた。しかし、今日に至るまでの機械化や大量生産をはじめとした、織りの技術に起因するさまざまな事象のうちには、あきらかに退化や衰退と考えざるをえない状況も出現している。

手仕事への回帰

織りの技術は、人類が先祖から受け継いできた手仕事のひとつであるが、皮肉にも手仕事の集積

から誕生した動力織機の出現以降、従来の手仕事によるモノづくりという古くからの生産システムは、次第に動力で稼働する機械にとって代わられて、機械化による大量生産システムが全世界的に普及することとなった。そして、今やわれわれは、人類がこれまでに経験したことのなきわめて便利な時代のなかで生きている。しかし、その一方でわれわれは、いたるところで環境破壊を引き起こし、人類の文化遺産ともいえる手仕事によるモノづくりの多くも放棄しつづけている。たしかに現代社会は、便利このうえない時代ではあるが、自然災害は今なお世界中のいたるところで頻発している。自らがモノづくりをすることなしに、機械

化によって大量生産されたモノが容易に手に入るという生活があたりまえになってしまったわれわれが、手仕事によるモノづくりを放棄しつづけているということは、自然災害でライフラインが途絶したさいの生き延びる術をも放棄しつづけているということにほかならない。

そうしたことから先の特別展では、われわれは今まさに「手仕事への回帰」を真摯に実行に移すべきであるというメッセージを発信した。これは、半世紀近いフィールドワークの末にたどりついた答えである。



イカットを織るアトニの女性（インドネシア、ティモール島。1970年）



イカットの衣装をまとったアトニの父と娘（インドネシア、ティモール島。1970年）



輪状に織りあがったバリ島トゥンガナン村（インドネシア）のイカット



特別展「世界の織機と織物——織って！みて！織りのカラクリ大発見」の展示風景。会場には、織物のタテ糸をイメージした展示デザインがほどこされた